

強者の戦略

こんにちは。今回は擬古物語『我が身にたどる姫君』からの出題です。

次の文章は、『我が身にたどる姫君』の一節である。仲秋の名月の晩、「宮の中将」と「殿の中将」の二人は、洛中のある邸で過ごした後、西の郊外にある上皇(嵯峨院)の御所を訪ねることにした。これを読んで、後の問に答えなさい。

月はふけゆくままにいとど澄みのぼりていふよしなきに、「ア院こそなほゆかしけれ。今宵いかながめおはしますらむ」と推し量り聞こえて、みな馬に乗りかへて嵯峨に参り給へれば、「イ思ひつるもしるく大殿籠らぬ御けしきにて、琴の御琴弾きすさませ給へる、ウあたりの松風さへそぞろ寒きに、笛を同じ調べに吹き合はせて、二人中門のほどにやすらひ給へる、かぎりなくおもしろし。

いといたう待ちよろこばせ給ふ。やがて「コなたに」と召しあれば、これも姫宮のおはします御簾の前を、死ぬばかり思ふべし、いといたう用意して歩み出で給へるさまども、いづれとなくめでたし。「今宵は内の御遊びなどもやと思ひつるを、暇ものせられけるを。」ワわざとこそおどろかすべかりけれ」とのたまはず。

(宮の中将、)

オまづぞ思ふ都の秋の月見ても君すむ宿の松風の声

殿の中将、

カ飽かなくに出でし雲居の月影を慕ふ心のいつかおくれむ

と奏し給ふは、もの怨じさがなくし給ひし宮の御腹なり。

(『我が身にたどる姫君』による)

注 ○姫宮＝嵯峨院の皇女。

○おどろかす＝ここでは「誘う」の意。

○もの怨じさがなくし給ひし宮の御腹なり＝殿の中将の出自の説明。「殿の中将は酷く嫉妬をなされた宮の御子なのであった」の意。

問一 傍線部(ア)(イ)(ウ)を現代語訳しなさい。

問二 傍線部(エ)「わざとこそおどろかすべかりけれ」と院が言ったのはなぜか。

問三 傍線部(オ)について、掛詞に注意しながら現代語訳しなさい。

問四 傍線部(カ)の和歌について、ここで用いられている比喩を説明しなさい。